

地域と協同の 研究センターNEWS

2024年8月25日発行

240号

研究センター創立30周年記念特集 ①

対談 50年を超える信頼関係 内堀信吾さん(93歳)・田辺準也(85歳)

文責：伊藤小友美(事務局)

地域と協同の研究センターは今年度創立30周年を迎えます。そこで、創立のころを振り返り、未来を展望するために研究センターニュースでは「30周年記念特集」を組むことにしました。

8月19日、美濃の山の緑と清流木曽川の流れの豊かな岐阜県加茂郡八百津町を訪ねました。1876(明治9)年創業の内堀醸造株式会社本社工場で、語り合ってくださいしたのは、内堀醸造株式会社会長の内堀信吾さん、研究センター理事の田辺準也です。内堀醸造商品開発課の加藤良重さん、営業企画部ブランド戦略課の松田絵里香さんもご参加くださいました。研究センター専務理事の駒井義明・事務局の伊藤小友美も同席させていただきました。

田辺さんと内堀さんの半年振りの再会は、まず握手で始まります。田辺さんの第一声は「研究室での内堀さんの写真を撮らせてください」でした。会長室とガラスの扉で隔てた研究室におじゃまし、ビーカーのお酢の匂いをかぐ会長のお姿を撮影させていただきました。以下、対談をご紹介します。



～出会い～

内堀さん：田辺さんに会って思うのは、人が生きる認識、概念に強く引かれるものがあることです。ものづくりのことも、50年前も今も全くかわらない気持ちです。そういう関係が今日まで続いていることをすばらしいと思っています。現場事務所というのがあって、私は今もそこで実験をしています。毎日です。そこで一生懸命研究しています。

田辺さん：内堀さんとの最初の出会いは、奥様とご一緒に私どもの事務所を訪ねて来られたときでした。

加藤さん：当時、新聞(めいきん生協創立)の記事を会長のお母さんが見て、訪ねたと聞いています。

田辺さん：そこから消費者と生産者の対等なおつきあいが始まりました。めいきん生協の創立総会の直後だったにもかかわらず、取引をしたいと内堀さんが来られました。酢醸造としては、最終的に消費者に求められなくてはならない。そういうことを考えると、生協は消費者の組織、おつきあいをしたいとのことでした。当時は、消費者と生産者としてのつきあいは一般的ではありませんでした。最初に、しかも、生産者の方から言ってもらったのが画期的で、それ以来生協が産消提携活動とか、生産者と消費者が対等に手をつないでよりよい商品をつくる活動をやってきたその原点になりました。単に取引先が見つかったというだけではなかったのです。

加藤さん：新しい販路を見つけたいといううちの思いと合致したのですね。

田辺さん：よい商品、よい酢を届けたいと毎日、検査をしておられました。内堀さんは、当時工場に併設されていた立派でない研究室でやっておられたのです。建前ではなく、「消費者にいい酢を届けたい」と言うだけでなく、自ら実践をしてこられました。そのことが私たちの信頼関係につながりました。内堀さんと奥さんが我々の小屋みたいな事務所に見えたときのことを今も思い出します。

【2ページにつづく】

地域と協同の研究センター 8月の活動

1日(木) 能登半島地震意見交換会	22日(木) 三河地域懇談会世話人会
2日(金) 第2回協同の未来塾、協同組合研究組織交流会	24日(土) 友愛・協同セミナー
3日(土) 第2回生協職員マイスターコース	25日(日) 多文化社会と協同組合懇談会
4日(日) 能登半島地震避難者交流会	26日(月) ウクライナ避難者支援情報共有会議・岐阜地域懇談会世話人会
6日(火) パレスチナ協同組合学習会	27日(火) コープこうべ難民雇用視察
9日(金) 第3回常任理事会、新城市教職員組合青年部平和学習会	28日(水) 協同組合ネットあいち幹事会
10日(土) オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村見学会(食と農フォーラム)	28日(水) 三河地域懇談会(生協総研研究集会オンライン参加)
13日(火) 尾張地域懇談会世話人会	30日(金) 第4回常任理事会
20日(火) 研究フォーラム地域福祉をささえる市民協同	

目次	対談 50年を超える信頼関係 内堀信吾さん(93歳)・田辺準也(85歳)	1	ウクライナ避難民のみなさんのくらし～面談で感じていること	5
	あいち平和行進 2024年 愛知県内通し行進参加報告 2024年6月	4	情報クリップ	6
			書籍紹介「食べものから学ぶ現代社会」	8

【1 ページからつづく】

加藤さん：そのときはどんな酢をもって行ったのですか。

内堀さん：当時、世の中は、醸造酢も合成酢も全部ひっくるめて酢でした。田辺さんに一生懸命話したのは、「醸造したものでないと酢とは言わない」ということです。田辺さんが一生懸命聞いて、組合員に話して、組合員が何回もうちに来て、1年くらいかけてやっと内堀は本物の醸造酢だとなりました。想いがぴったり一緒になりました。1年かけて、やっと取引が始まりました。

田辺さん：私も、消費者も勉強しました。以来、ずっと「酢は内堀」となりました。このたび、「めいきん生協の40年・私的回顧録 買い物の協同 人と人のつながり・絆」という書籍を刊行したのですが、そこでも触れています。当時の酢の写真も載せています。

内堀さん：「生協酢」というのがそのときに生まれました。生協の酢は醸造酢です。

加藤さん：ラベルにNとあります。Nは名古屋のNですね。

松田さん：当時は消費者に伝える手段がありませんので、生協で組合員さんに伝えるようにしてくれて、私たちがいいと思っているものを同じようにいいと思ってもらって商品が売れるようになったのですね。

内堀さん：醸造酢という言葉を知らない消費者に、それは何かということから話しました。

～イノベーション～

内堀さん：ちょうどいい機会なので、話しておきます。何に苦労したかということです。それは、静置発酵で酢をつくっていたとき、コンタミネーションが起きることでした。キシリナムが発生するので、毎日、家内がそれをすくって放っていました。これには本当に苦労しました。めいきん生協でも、「内堀さんの酢は、品質はいいけど、なんとなくくさいね」という意見がありました。なんとかしていい製品をおさめたくて、キャビテーター（通気発酵装置）を導入しました。1971年のことです。酢を熟成させて良い風味にすることも工夫しました。技術進歩への取り組みにより品質が向上し、安定した生産が可能になりました。

松田さん：静置法ではどうしてもコンタミネーションが起きます。コンタミによって酢の中にカンテンみたいなものができるのですが、それを酢こんにやくと言います。ナタデココも酢酸菌によってつくられていて、ナタデココみたいなものです。これができるとお酢の風味は劣化します。キャビテーターはステンレスの大きなタンクで、攪拌させて空気を送ることで、安定した品質、安定した生産が可能になりました。また、静置発酵だとゆっくりで時間がかかります。会長は、いち早く最新技術を取り込んだと聞いています。

内堀さん：組合員が内堀の酢の醸造方法について納得したところへ、キャビテーターを導入するということになり、話がたいへんややこしくなりました。その時に、田辺さんが、「内堀はいいものをつくりたい、その気持ちには変わらない。」と言ってきて、組合員が納得してくれました。

田辺さん：実は、その時いちばん静置法にこだわったのが私でした。詳しいことはわからないがそれが本来の酢だと思っていたので、変えるとは何事だと思ったのです。その私が組合員を説得したので、組合員も納得しました。

内堀さん：「内堀の気持ちはいいものをつくりたいということだけだ」と田辺さんが言ってくれたので、組合員と内堀醸造との信頼関係が盛り上がりました。そのときの決断は、双方にとって大きな決断でした。そして、変なにおいがするというクレームがなくなり、「おいしいね」と評判になりました。生協としても取り扱いが増え、うちも生産量が増えました。

～奥様（奈美子さん）との二人三脚～

加藤さん：キャビテーターを入れることは誰が思いついたのですか。

内堀さん：私と家内です。一生懸命家内と話し合っ。イノベーションに挑戦してきました。技術的に難しいのを、一生懸命勉強しました。家内は今入院していますが、「何が楽しかったか」と聞きますと、「一生懸命働いたのが楽しかったね」と言います。毎日勉強して、朝早くから、滴定（てきてい）をします。酢酸の量を調べる分析機器、すっぱさを計る機械で調べます。

アセテーター（食酢発酵に不可欠である特許技術をもった発酵装置）を買うときも、家内が「これがいい」と言いました。とても高価なので悩みましたが、家内に銀行へ行けと言われて、銀行に三拝九拝して借りました。

田辺さん：いつも奥さんが決めていて、すごいと思います。

松田さん：会長のお尻を、副会長（奈美子さん）が押している感じですね。

田辺さん：おつきあいがはじまって最初のころ、商売なのでお金の話になると、奥様が主導していましたね。経営的にはリードしていました。奥様の役割があったからこそ、内堀醸造は大きくなったのではないのでしょうか。あの時代で男女平等、文字通りの平等、家庭内のことは知りませんが、こと醸造に関しては対等平等だったのではないのでしょうか。

内堀さん：1979年に本社工場を移転しました。それまでは創業当初からの場所で酢の醸造をしていました。



本社の土地を買うときも、家内が「この土地を絶対買わないといかん」と言いました。「こんな（狭い）ところでやっていては、どんなにがんばってもこの器には盛れない。器を大きくするには、土地を買わないといけない。買うべきだ。」と強烈な意見で応援してくれて、そのおかげで今があります。

実は、昔は味噌とたまりと酢の三つの醸造を家業にしていました。家内が、「味噌とたまりはやめるべきだ。酢だけにすべきだ。」と強烈に言ったのです。祖先がやってきたことなので、夫婦ゲンカをだいぶやってもめました。しかし酢一つに集中して、今日があります。こういうことは大事な話なので、息子たち、孫たちにも伝えていきます。女性は表には出ないけれど、大事なところをちゃんと握っていると思います。

田辺さん：奥様の役割が大きいというのは理解していたが、今日お話を聞いて、非常に大きかったことと、内堀さんが信頼していたということ、その夫婦関係のすごさということを感じました。今の時代のジェンダーの問題として、そういう面でも先駆的です。その力が見事に事業の発展につながっている。奥様の力なしにはできなかったことですね。助け合って、協力しあって、協同された。とても大事な語り継ぐべき歴史だと考えます。

加藤さん：会社の大事なときには、副会長の話が必ず出ます。そのことをとてもうれしく思っています。

松田さん：当時は女性が表に出る時代ではなかったから、余計すごいと思います。

～「研究センター」と「ものづくりの思いを語る会」～

内堀さん：イノベーションには専門的な知識が必要です。専門的な理解をして、設備も入れて、日に日に知識を高めることも重要です。仕事というのは、みんながそれぞれ協力しあってやらないとうまくいかない。研究センターをつくって、ここにかかわらないといけなかったのですが、十分なことができずに来ました。

田辺さん：今日はその話をしたくて来ました。生協では、消費者と直接顔をあわせてものづくりをしたいということを最初に感じました。内堀醸造に対する理解を深めるには、現場に足を運ぶことが大事です。工場に来て消費者が学んだことは大きい。消費者が酢というものを理解しました。私は鈍感で理解できなかったが、消費者の方が深く理解したと思います。「内堀醸造の酢を広げないといけない。」といちばん感じたのは消費者でした。それが内堀さんを支える力になったと思います。

加藤さん：工場見学や、商品づくりを消費者の方々と一緒にできるのは、生協さんだけです。見学が増えて、信頼関係が高まると思います。ありがたいことだと思っています。

田辺さん：そういう関係があったから今日があります。新しい商品開発もして、ここまで育てあげられたのは素晴らしい。

研究センターをつくらうとしたとき、生産者と消費者との関係を密にしたいと考えました。どうしたら維持発展させられるかがメインで、そのためには生産者と消費者の協力しあう関係をまとめて、次世代に伝える必要があると思います。工夫してよりよいものにするために考える必要がある。そういう事業をどうつくるかを目的のひとつにして、研究センターをつくりました。内堀さんにも最初に呼びかけて、会員になっていただいています。

反省しないといけないのは、肝心の事業としてどう発展させてきたか、十分なことができませんでした。やってきたこととしては、「ものづくりの思いを語る会」を作り、勉強会を重ねました。時には「ものづくりの思いを聞く会」も開催しました。しかし残念ながら、ものづくりの思いを語るだけでは、限界があります。これだけではだめではないかと思うようになりました。生産者と消費者が歴史を発展させるのが課題です。次世代の方に、生産者と消費者が力をあわせるにはどうしたらいいかを相談して、会は一応解散しました。成功例とは言えないが、内堀さんと努力をしたことは紹介したいと思っています。

メーカーさんは日夜がんばっています。努力しています。そういう経験を交流する必要があると思っています。研究センターという場でもそういうことができるといい。ここへ来て、まず研究室をまず見せてもらったのは、そこに意図がありました。

内堀さん：10月に岐阜大学で、学生のみなさんを相手に「日本の酢づくり、発酵の楽しみ」について語ります。若い方に聞いていただけるのを楽しみにしています。

あとがき 内堀醸造の女性社員おふたりが、この対談に参加されたことをうれしく思いました。内堀醸造のホームページに、「伝統と革新を胸に、内堀醸造はこれからも高品質で安全な商品を作り続けます」という言葉があります。充実し革新し続けている本社工場も久しぶりに見学させていただき、伝統を継承し、脈々と歴史をつなぐ姿勢を肌で感じた3時間でした。ありがとうございました。会長には、2月の東海交流フォーラムでもお話しいただきました。東海3県の生協組合員から「とても元気をいただいた」と大きな反響があり、会長のファンの多いことを実感しています。

(いとうこゆみ)



内堀醸造のみなさんと田辺さん

あいち平和行進 2024 年 愛知県内通し行進参加報告 2024 年 6 月

岩松豊明（コープあいち労働組合）

2024 年あいち平和行進に 5 日間ですが参加できて、参加者の皆さんと、熱い思いを共有でき、大変でしたが楽しい時間を過ごせたことに職場の皆様をはじめ、周りの方に感謝いたします。まだまだ広島まで行進は続きますし、原水爆禁止世界大会の成功、来年の被爆 80 周年に向けて平和の声を大きく広げていきたいです。

私はコープあいちの職員で 63 歳です。今は定年後の再雇用でコープ上社店にいます。生協を退職前に愛知県内の 12 日間を通し行進で、歩きたいと思っていました。去年は 2 日間しか諸事情で歩けませんでした。今年は幸い行進期間中に 5 日間休みを頂きましたので、休日活用法で、5 日間コープあいち労組の通し行進者として歩きました。今は Web も広がり、リアルタイムで「あいち平和行進」で検索、または X で見られる時代ですので、自分の感想を中心に報告します。12 日間の全体は、1 日ごとのニュース「2024 あいち平和行進あるく」blog で検索ください。

5 月 31 日（金）静岡県湖西市新所原での静岡県から引継ぎ、いよいよ愛知県へ、終着の桜丘学園の太鼓の演奏など学園あげでの歓迎集会は感激しました。桜丘学園には、平和の塔があり、「ヒロシマ原爆の残り火」が今も灯し続けられています。学校をあげて平和に取り組み、教職員は勿論、高校には学生の平和委員会もあり、ウクライナの侵略などでは声明も出しているとの事、感銘を受けました。このように中学、高校の教育の基本に平和が据えられていることが本当はあたりまえであり大切と思いました。桜丘学園の平和の取り組みは、戦時中の食をテーマにした漫画「戦争めし」7 巻（秋田書店）に掲載されています。

6 月 1 日（土）豊川市緑町公園では、集会の前に、旧豊川海軍工廠では空襲で挺身隊員ら 2500 人以上が亡くなられており、犠牲者に黙とうしました。公園の中には慰霊碑があり、戦争体験者の高齢化が進む中で、こうした地域の歴史を伝えていくことも平和行進の大切な役割だと感じました。コープ諏訪店では、職員、組合員のみなさんの歓迎集会有り、このように各地での職員（宅配・お店・福祉など）と組合員のみなさんの歓迎に行進は励まされます。各地のみなさん本当にありがとうございました。

6 月 4 日（火）常滑駅前で、知多ちんどんの会の方々が太鼓を鳴らし、花笠をかぶり、華やかに出発集会を盛り上げてくれました。行進を地域の様々な方が盛り上げてくれています。親子で生協のヒロシマ行進に以前参加された方々が、今も平和行進盛り上げ隊（清州の 3 姉妹など）で行進を盛り上げてくれる方々も見えます。

知多半島は広いので、東側と西側を交互に歩いているとの事、納得です。5 月 31 日・6 月 1 日は目の不自由な方が、6 月 4 日は片足が不自由な方が、6 月 6 日はご年配で片足が不自由でゆっくりとしか歩けない方も一生懸命行進されていました。自分の足で歩く事への決意が伝わってきて心をうたれました。

6 月 6 日（木）津島・愛西市・稲沢市のコースで、愛知県はやはり広いと実感しました。稲沢市役所集会で偶然私と同期に入協した野田哲史さんのお父様とお会いしました。彼は以前に生協は退職しましたが今は京都で高齢者支援の活動を元気にしているとの事です。こういう出会いや再会もありました。

6 月 11 日（火）扶桑・犬山・各務原で岐阜県へ引継ぎです。フィリピンから参加の国際青年リレー行進者のリレーさんは、アドボカシー（共感し自分も賛同し、協力していくことの大切さ）と継続していくことの大切さをいつも強調されました。今まさにそのことが求められていますね。

コープあいちの来年の平和行進に向けての提案です。

私は今年、わかやま市民生協のリレー行進で、愛知県で 1 週間歩いた白水幹人さんと 6 月 6 日からリレー行進を引き継いだ北村美咲さんと一緒に行進をして、最初はリレー行進者を東京から 1 週間交代で出してわかやま市民生協は凄いなあ。だけでしたが二人の成長を見ているともちろん半日でも 1 日でも平和行進に参加することも大切ですがリレー行進で繋ぐこともとても大切と気づきました。和歌山市民生協は、毎年東京から岐阜まで 1 週間のリレー行進者 7 人で行進を繋いでいます。東京からのリレー行進は大変ですが、愛知県内 12 日間ならコープあいちでもリレー行進は可能では？と思いました。

来年は被爆 80 周年です。あいち平和行進は 12 日間県内を歩きます。12 日間をコープあいちの職員のリレー行進で繋げたら「今は〇〇君、××さんが歩いています」と生協の中でも関心が広がると思います。生協運動は、職員と組合員が力を合わせて、地域の方々とも協力し合っていくものだと思います。平和行進はまさに自分自身もそうであった様に、生協運動を学ぶ場だと思います。ぜひご検討ください。

最後に一昨年亡くなられた京都の生協運動の先輩、井上吉郎さんが、車いすで、話せなくなっても看板を持って続けられた「無言宣伝」での言葉を紹介します。

殺すな殺されるな 私たちは微力かもしれないが無力ではない

井上さんが亡くなられたのちも、毎週月曜日の「無言宣伝」は今も仲間の方々によって続けられています。（いわまつ とよあき）

ウクライナ避難民のみなさんの暮らし～面談で感じていること

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は7月31日現在2,667人、在留者数は2,005人です。男女別では男性が768人、女性が1,899人、年代別では18歳未満が424人、18歳以上61歳未満が1,878人、61歳以上が365人です。東海地域では、愛知県は116人、岐阜県は12人、三重県は1人、東京は622人、大阪は132人です。愛知県に暮らす人の数に表れてはいませんが、転出（出国）した人、転入した人がおり、実際には変化があります。先月に比べて東京は2名増加、大阪は1名減少しています。

Cさんとの面談

単身で日本へ避難をしたCさんとは定期的に面談をしています。年齢が若いこともあり、現在の生活について伺いながら、変わった様子がないか、困ったことがないか、トラブルに巻き込まれたりしていないか、会話をしながら確認をしています。第三国に避難をしている家族とは毎日連絡をとっているそうです。早く家族に会いたい、できれば家族を日本に呼びたいという希望を持っていますが、現在は、政府や財団からの支援で生活をしており、安定した収入はなく、この後のキャリア等、見通しが立っていません。そのためすぐに家族を呼び寄せることは叶いません。現在は、短時間のアルバイトをしながら、日本語を学ぶ場へ毎日通っています。毎年7月と12月に開催される日本語能力試験の受験を検討しており、今年の12月に2級の合格を目指して、毎日日本語学習に集中しているようでした。日本語能力検定は、1級から5級まであり、通常はN1～N5と表記されます。一番やさしいレベルがN5、一番難しいレベルがN1です。「読む」力と「聞く」力をはかる試験です。

Cさんが目指しているN2は次のようなレベルです。（日本語能力検定ホームページより）

「読む」力：幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な評論など、論旨が明快な文章を読んで文章の内容を理解することができる。一般的な話題に関する読み物を読んで、話の流れや表現意図を理解することができる。

「聞く」力：日常的な場面に加えて幅広い場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。

日本語能力検定は、企業での就労、大学や専門学校への入学の際、在留資格申請、社会的な資格認定などで、日本語能力を確認する際に必要とされます。Cさんが合格を目指しているN2レベルは非漢字圏の人にとってはかなり難易度が高いですが、N2の取得は今後の日本でのキャリア形成に大きなプラスになります。引き続き、定期的に面談をしながら、Cさんの日本での生活を応援していきます。

Dさんとの面談

巡り合わせの機会があり、Dさんのお宅を訪問しました。初対面のDさんは、しばらくは緊張をされていましたが、流暢な英語をお話しされることもあり、お互いのことを話す中で、少しずつ緊張がほぐれてきたようでした。今後の日本での生活をどのようにつくっていくか、仕事や学びの機会とその可能性を中心に話を伺いました。日本語の習得に苦労されており、そのため、日本での就労の機会や、学びの機会の選択肢は多くはありません。またご自身の専門分野やスキルがあり、それらを日本社会で活かすためには日本語力が必要です。これはウクライナ避難民に限らず、専門性やスキルの高い非日本語母語話者が、直面するキャリア構築でぶつかる壁でもあります。日本社会の需要と、本人の興味関心や専門性と日本語力との重なりがない場合、別の道を模索しなければなりません。しかし、専門性やスキルが高く、経験が豊富な人ほど、それまでのキャリアを諦めて、ゼロからスタートさせることは大きな決断であり、簡単なことではありません。また本来自分ができることと、それを活かすことができないそのギャップに精神的なストレスを抱える人も多くいます。Dさんは、ご自身のこれまでの専門性やスキルを活かすことができる道を模索しています。日本でその道が切り開かれる可能性を少しでも応援できたという思いから、私にできることでサポートを継続していきます。Dさんの悩みの1つは友達がいけないこと。社会との接点や人との出会いを作っていけたらとも思いますが、ボランティアな活動ですが、一緒に訪問をしたり、一緒に出かけたりしてもいいよと、いう方がいらっしやいましたらお声掛けください。

（かんだ すみれ）

情報クリップ

co・opnavi 2024. 8 No. 867

変化する組合員活動のスタイル

日本生活協同組合連合会 2024 年 8 月 A 4 判 32 頁 363 円 (消費税込)

<私たちの「この一枚」>

佐賀の戦跡動画プロジェクト

特集 変化する組合員活動のスタイル

<今日も笑顔のコープさん>

スズキ生協

<想いをかたちに コープ商品> CO・OP 焼きおにぎり

<生協大好きママコブ山さんの 教えて! CO・OP 商品>

CO・OP 中華丼の具

<CO・OP の役立ち♪家庭用品>

CO・OP おふろ掃除 楽々シート

<組合員に支持される店づくり・売場づくり> コープおおい

コープさが生協

<日本全国 宅配現場におじゃまします!>

生協コープかごしま

<松丸 奨先生の食育エッセイ> 進め栄養!

<生協の D&I 多様性のある職場をつくろう>

コープみらい

<この人に聴きたい>映画監督 俳優 脚本家 柳明日菜さん

<ほっと navi>

京都生協/ユーコープ

<コミュニケーション広場>

生活協同組合研究 2024. 8 VOL. 583

生産者と消費者のつながりが創る新たな農畜水産業の可能性

公益財団法人 生協総合研究所 2024 年 8 月 B5 判 64 頁 定価 550 円 (消費税込)

巻頭言

ローカルな知恵をグローバルに活かす

生源寺眞一

特集

生産者と消費者のつながりが創る新たな農畜水産業の可能性

CSA の実践にみる生産者と消費者の〈つながり〉の価値

波多野豪・飯尾裕光・藤本穰彦

生鮮野菜流通における需給調整の方法

池田真志

生産者と消費者の交流が 6 次産業化にもたらす効果

大西千絵

生協産直におけるオンライン交流の取り組み事例報告と展望

奥山栄一

生協産直の現在と組合員の生協産直に対する関わり方

ー第 11 回全国生協産直調査よりー

宮崎達郎

■国際協同組合運動史 (第 29 回)

1946 年第 16 回チューリッヒ ICA 大会

鈴木 岳

■本誌特集を読んで (2024・6)

栗田克紀

■私の愛蔵書

市民政調 選挙制度検討プロジェクトチーム・片木 淳

『公職選挙法の廃止一さあはじめよう市民の選挙運動』

三浦一浩

■研究所日誌

●公開研究会 「戦争と平和をめぐる協同組合・

生協の歴史から学ぶこと」

8/28

●9 月 12 日開催アジア生協協力基金活動報告会

●公開研究会 「現役世代の孤独・孤立の実態と

今後の社会のゆくえ」

10/3

●11 月 30 日 第 33 回全国研究集会 〈開催予告〉

●アジア生協協力基金 2025 年度・助成金一般公募のご案内

文化連情報 2024. 8 No. 557

「骨太方針 2024」の医療・社会保障改革を複眼的・批判的に読む

日本文化厚生農業協同組合連合会 2024 年 8 月 B5 判 80 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529*注

農協組合長インタビュー (98) 茨城むつみ農協

JA むつみとしての歴史を積み上げた 30 年

石塚克己

会員の利用結集と協同運動が大きく前進

文化連「令和 5 年度事業報告の概要」

伊藤幸夫

令和 5 (2023) 年度食料・農業・農村白書を読む

田代洋一

本格化する「医療・介護連携」①

地域包括ケア支え、地域に愛される病院へ

波多野善明

二木教授の医療時評 (222)

「骨太方針 2024」の医療・社会保障改革を
複眼的・批判的に読む

二木 立

アメリカの医療政策動向 (41) 最終回

2024 年度アメリカ大統領選挙と医療政策

高山一夫

協同精神のリレー (17)

「苦しみ」の自覚について

伊藤澄一

新連載

「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (1)

「関係とは、有るか無しではなく、いかにこじつけるかだよ」

梅津光生

似て非なるドイツの介護制度

拡大する給付と不足する人材

吉田恵子

野の風 霞ヶ浦編

農業者・生活者として語る (8) 盆綱

山口和弘

変わる日本のまちづくり (48)

移動支援と地域交流支援

—NPO 法人さっぽろ福祉支援ネットあいなび②

杉岡直人・畠山明子

国民が安全安心に暮らせる社会の構築 (21)

若い世代が紡ぐ伝統文化—タヌリム協同組合

友岡有希

多様な福祉レジームと海外人材 (74)

日本は外国人労働者を労働者として受け入れてきたのか

安里和晃

臨床倫理メディエーション (75)

自己と他者を受容するための「ケア」と「倫理」中西淑美

デンマーク&世界の地域居住 (181)

「ぶんじ寮」とクルミドコーヒー (東京都国分寺市) ②

松岡洋子

◆第 40 回厚生連薬剤師研修会・開催のお知らせ

□書籍紹介 どうして戦争しちやいけないの

▶線路は続く (188)

海を貫く 香椎線 / 西山健史

▶最近見た映画

関心領域 / 菅原育子

社会運動 2024.7 No. 455

飢える社会が来た 生産者と消費者の対等互恵で生きのびる

一般社団法人 市民セクター政策機構 2024 年 7 月 A5 判 144 頁 本体価格 1,100 円 (消費税込)

FOR READERS

人間らしく生きるための食を取り戻す

季刊社会運動 編集長 柳下信宏

・part 1 生産者につながる

誌上討論 持続可能な生産と消費とは

① お互いに支え合う関係が未来につながる

農業生産法人 (有) 王隠堂農園 取締役

王隠同正悟哉 (まさや)

② わかって食べることを広めたい

生活クラブ連合消費委員会 前委員長

萩原つなよ

③ 生活クラブが実践する対等互恵

生活クラブ連合会 専務理事 柳下信宏

④ 遊佐町共同開発米部会

俺の米を食べてくれる人の存在が、米作りのパワー

JA 庄内みどり遊佐町共同開発米部会

会長 今野 修

⑤ (株) 平田牧場 大切に育ててきた豚を食べてもらうための試みと希望

専務執行役 茂木陽一

⑥ 移住体験 TOCHiTO (とちと) 産地で暮らし、

組合員と生産者の架け橋に TOCHiTO 住人 宮田あい子

・part 2 「食料・農業・農村基本法」の改正

① 本質的な解決がなければ日本の「食」は絶える

横浜国立大学名誉教授 田代洋一

② 食料システムを主体的、民主的に考えるために

京都橘大学経済学部准教授 平賀 緑

③ 院内集会レポート

生協グループの連帯による農業政策提案

・part 3 持続可能な生産とは

① オルタナティブ・フードシステムの現在地

千葉商科大学人間社会学部准教授 小口広太

② 地域を元気にする有機給食

専修大学人間科学部教授 轟 (つる) 理恵子

③ 鬼無里の杜 組合員の会社

(株) 鬼無里の杜 代表取締役社長 青木幸彦

事業部長 戸谷稔

生活クラブ生活協同組合・長野前理事長 千村康代

書評

『くらしのアナキズム』村松圭一郎著 ミシマ社 2021 年

勝俣 誠

『日本の食と農の未来』小口広太著 光文社新書 2021 年

希代 藍

連載 食べ物でつくられている私とあなたへ 新連載

消費者と生産者の関係の結びなおし

国際ジャーナリスト 堤 未果

ボトムアップ民主主義の時代 第 2 回

「新たな段階を迎えた LIN-Net」

政治学者・市民セクター政策機構客員研究員 岡田一郎

ネット最前線・観測記 ⑤

相模原市・人権条例の「知的不誠実さ」または「答申」という希望

市民センター政策機構客員研究員

外国人権法連絡会・事務局次長 瀧 大知

韓国の社会的経済と政治 第 9 回

異種協同組合連合会は協同組合の“アベンジャーズ”

城南市協同組合協議会政策委員長 /

市民セクター政策機構客員研究員 崔 珉竟 (チェ・ミンギョン)

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介



井貝順子会員からの書籍紹介

食べものから学ぶ現代社会——私たちが動かす資本主義のカラクリ

著者：平賀 緑 著 出版社：岩波書店

発売日：2024年1月 岩波ジュニア新書：224ページ 価格：1,034円（消費税込）

井貝順子会員のご紹介

著者：平賀緑氏から

食べものから、現代社会のグローバル化、巨大企業、金融化、技術革新を読み解いてみたら、思いがけず経済学の理論（セオリー）にケンカ売ってるのか！的な本になった。経済学には、自然を無限にあって当たり前の「所与」と捉えていたとか、日々の生活を支えている多くの無償労働や利他的な行動を無視していたとか、リアルな生活現場からはビックリ！な前提設定がじつは多い。これほど、生きるために必要な領域を無視して使い捨てる設定で「経済」を語っていたのかと驚かされる。だからこそ、今ごろになって「コモン」や「共」など、経済学が無視してきた領域を見直そうとの動きも始まっている。人も自然も壊さない経済を考えるためにも、まずは現在資本主義経済のカラクリを、食べものから、ぜひ「ジュニア新書」でサクッと読んでみてください。

井貝順子会員から紹介

経済学の教科書に必ず書かれている「需要と供給」、「比較優位」などの概念が現実社会ではいかに歪められているかを食べ物視点から概観。人の生存に不可欠な食や農が大企業による寡占状態となり、さらには金融商品化されている実態に驚く。国産より外国産食品の方が安い本当の理由—輸入した食品が安いのは大企業が大量購入した物がタックスヘイブンを經由する事で税金を払う必要がなくなり安くなっていること、ウクライナ戦争による小麦の値上がりが妙に早かった理由—小麦などの食料もマネーゲームの駒の一つになってしまっていて、ちょっとした情報で相場が大きく動くのが特徴、これから相場が上がるかもしれないと思わせる小さなきっかけで大きく値動きする（そのきっかけが戦争…）

「世界はますますタックスヘイブン化している」。そのため、「富と権力を貧しい人々からゆたかな人々に移転する史上最大の力」のカラクリによって、「タックスヘイブンに富を吸い上げられ続けられたら、国家も私たちが地球の自然環境も、もう長くは持たないでしょう…農村への投資、子育てや教育への投資、保険やケアへの投資などなど…税収ロスによって、正しい富の分配機会が奪われているのだと思います」(p.76)。

岩波ジュニア新書なんだけれど、ジュニアだけが読者なんてもったいない、サクッとではなくじわじわと、心に沁み込んでくる内容です。

研究センター9月活動の計画

- 3日(火) 尾張地域懇談会
- 5日(木) あいち在宅福祉サービス事業者懇談会・名古屋市懇談
- 5日(木) 第1回組合員理事ゼミナール世話人会
- 12日(木) 第3回協同の未来塾
- 14日(土) 第3回生協職員マイスターコース
- 16日(月) 子どもの学習支援出版記念企画
- 17日(火) 名城大学人間学部ボランティア入門第一回
- 18日(水) 研究フォーラム環境世話人会
- 20日(金) 三河地域懇談会世話人会(安城市ing 見学)
- 21日(土) 第21回東海交流フォーラム第3回実行委員会、理事懇談会
- 23日(月) とうかい食農健サポートクラブ総会
- 24日(火) 名城大学人間学部ボランティア入門第二回
- 27日(金) 第1回組合員理事ゼミナール
- 29日(日) サードセクター研究会(経済学経営学会)

地域と協同の研究センター
ホームページ

下記QRコードをご覧ください。

ホームページQRコード

地域と協同の研究センター
Facebook

下記QRコードをご覧ください。

FacebookQRコード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。